佐賀のしるべ

027
74
2

月日たちあし文改て用ひ暮ま
ほそ道えんの日ゆ二人
院をゆむてまいきくこと幸ゆまて
送てはくりえ泊しは暑さよ松島を
杖ゆるよ高館ゆ越そ入の院庵と
水戸御道を伝ふ今既て
三ゆあるあるよなり賀其き場を
ゆ編ゆてあるけゆ

東京都立中央図書館蔵書印

蝶のうき事はかけてゆくえ知　翠川

えうきや四五ふるみ[illegible]ものさび　吉陵文　米府

旅途三千里外おもひを

月にして松多一見の志に

翠川米府の両士を帯

[illegible]の来てなくは

[illegible]　椿堂

栞はでさてやむ松の花　翠川

早稲種の主[illegible]も錦掛て　米府

人の来るこゝろ巻る門板　四海

月乳の遠く低き浪の上　曹品

牧の肥[illegible]るのあき風　松園

[illegible]の[illegible]の菌を押なく　高淫

[illegible]用憂を[illegible]ふ　竺山

よつゝの巻聚りのまやえて　杏曉

清秋はあらう秋の夢　蛟山

風は皮に吹けば嘯きし　考破

宮殿の簾よかゝげ山伏　蕉中

いろ〳〵の咲く自は下の蕊　白花

秋は白いをさら〳〵塔の羽　乙六

秋俗は掃さし入る裏の白　推巨

百もはらう寺の簾も　坐

むけ水よきしの秋は逸さく　省典

をゝの栖ようしすの時　洪石

右一順

各送ぶ此あり略

年を五六ぶ歩ぶ彩しうまる

ろくなりてとに金沈見る

天竜はまて狩ぶよく院衣　天孫文　蕉中

見興俄ぶ

霧まゝやあわよく匠のはうう　桂堂

海

千代倉の門はのくしなくさに　琴川

小板の中山

姫の道遠かりしかの島うれ　采府

ゆくして

笑楽ゆかさしは字はの浦風　蓑中

田子の浦

ゆかれ笠をなりてかこの山　琴川

浦なれて海士なれそ空身し　蓑中

箱根

馬かりて湖を下りし蓑の浦　仝

東路の見て清水さと清水

中ふと笠はの風ちくりて

下流の旅庵よもられむ

なしくるぬ

和月中の之はよ位をて

杖を戒板戸幸を竹百足木戸

かちまく柿の実を喜びけり　蘇川

麻沼御巡り入る右の国分寺

ふるさう巻みゐる

池あるみちしらうま芒　米府

宮ばいはるおくのあるくしく

けうきとはつく

日光山御神祭拝

天地の間より高松まちまちの　蘇川

るはようもう後ゆこ地まる　岩中

長山やまとみつてく紙ふう　米府

高角氏を討し那須ゆきとう

八幡宮より殺生石を拝す

夢まぼろし松をもの石の長い　蘇川

芦野

おようて来拝さなしの御歌　岩中

[illegible]　米府

[illegible]　翠川

何武限川

[illegible]　岩中

[illegible]

[illegible]　仝

五十巴[illegible]入

来の実を噛[illegible]入　翠川

[illegible]　米府

鯖　蛇

[illegible]　岩中

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　翠川

大木　戸

仲夏頃や田植なかるる頃　　仝

はるゝ田植の時間り屋を造て

水浅の情なく振舞とかや

木の葉ちりて除草屋きしる田植　　米府

武恨の松ともつよ苔の花　　黎川

仝　五月十日　廿七日仙台へ入

四つ辻や人を木の間の郭公　　米府

新形蓑をと

ふるさとの耳にてかけん胃魂　　雄閑

ふる雨の中よりはまくさ　　黎川

舟人の名にはもちもてこしよ　　右京

芒の痩をかこひ柴垣　　仙玉

きぬの山をれまよなくて　　米府

木元秋をうしろ白く　　岩中

右一順余暑

鄰閣の丘の茶店に遊ぶ

松島をおもふ夏嶽のたしなみ　芝中

卓角鉢の巻を進て市門の

壺の碑よりいでし

一ふしの石墨古つさりて叫る　翠川

拉竜の大社松島之助をもて

を焼いにも待る町より下り帝る

坂を始て音休沉公金人金る　仝

汐風や松しらかはしてはる巻　米府

軒下ゆ舟うてゆ波の海巴

のきけしゆ行なく松島ゆ

富山の根をる待坂内の夏茶

古人を笑つめしとゆ

うなゆれ丈ゆ松島ゆ

瑞巴精舎ゆ指庵をゆ伯

万古しまやなるあしてはこゆる　翠川

松時やけふうちをを松　え　米府

時をハ立大きよう姿を変ゝ

毎年姿を変ゝ松人の

ゝをさして

[illegible]や春ゝけふし紅の乳　雲中

[illegible]田の玉川末の紅山寺を

[illegible]を城堅の夕涼ゝ

[illegible]ハ春を指さる風の

徒馬ゝ昔を思ひ出宿山ゝ

蒼天ゝ町並ゝ懐ふ乳　聚川

高雄を菜ゝ佛眠寺ゝ

木の下葉ゝ詠を城の月

二軒茶屋の一献々諸玉の原切

[illegible]の宴ゝ見ゝ

茶々路玉亭ゝ招ふ

[illegible]

菖蒲葺日洗車やむつれ町　翠川

落ふを初かまうけるる庵哉　米府

いはくしるゆしてれるるる人

夏来れ花ちよさぬ世馬武　翠川

大庚ふ人情を〻未練よ出る

荒傑や白浪よせてふつ〻咲　雲中

盤城の稽大よ也し伯なる泊る

助川の駅宴笑を常陸ふ

三日はふ〻ふ男清水ふさて

海苔は強に勇ふ清ふふ　米府

水戸鳥町ふ戸る翌日筑波を

けして湯袋ふ〻出向る高ふ

松ふふふ一板城あふ

君坂ふまけふいねふ一板ふ　翠川

東言をちかふふもちけふ

みゝ糸や板ふば英ふ筑波山　米府

姫のあるやをたもたくされ　翠川

大内宿をくだりて例の茶店より

清流鮎をなぶる蛍　一くく

荒海詩の碑は跡ゆくふ川

お本同氏を訪ひ丈ようあり一日

息栖祭田を指す法舟を出て

五百羅漢をあうれ

枯れ蓮やさうしを乱れ出る鶴　米府

東武を度ゝ一日八巣市子

おの〳〵孫を迎へる

嫡初て来れば白ちゝ舎りを　翠川

ようゝ来ぬきて

用ようれくれの松風は西　蕉雨

むかし移れあとをとゝまりて　米府

市社やしろのみかさ風　裳中

灯を点ぬる月はかすみ声　羽

落ようしけるる椎の実　川

七種の秋をまてなれる外や　中

玄関ちなる恨むあるる女　羽

さかるかるを憂も探るし　府

牡丹うさ者ふまを造るぬ　木

念仏る泥ふきこえるうみる坊　羽

主徒為変る舟かるして　府

冷すり月は故と一まるれ　川

明代いわって春のけるを　羽

稲束は上よわそる　硯　笞　府

百代なの場ふてや化え板　川

花苗を植るけるる体る入り　羽

ぬきさ蒔ひる宗なり　中

下略

六月六日品川を立て江の島へ回る

鎌倉は此東内さくで和　麓　婆川

鳴でこは袖ふるまつも木下れ　蓑中

青々所

乳さけと花先もえきん宋よる　卓池

苺は色くれ　幸を数　米府

涼雲清ふるを連をさしらえて　翠川

さ和のつるは七夕の月　蓑中

ホしはみはまてれ立和あり　府

清成まつる名桑もらく　川

大日へ行ちなどち面つる　池

ほかそげ宮社庶　府

鰹けよ人をり巡賽仲間　中

にも利さぬ恋のもたえ　池

ようなな紅葉山の和ハれまつ　府

却を求めし雑詠の句 中

歯栗拾ふ出立ての義経い 地

供のはくるあ吉乃意かな 府

琴子は是秋うを在社務所さ 川

かくでそ強へそる 的糸 地

ほくまの中の意みなるよう秋さふ沢 中

別てもしかのそふ保寿畑 川

下畧

篇ふ そそて

土産ふいれを中さう不二能波 米府

道しるし俳吟八後編ふ譲りて

記れ蕉中法の道し花形の彩古

取支るこつも高鉢ふそ分手

所しの白球遠加る

高館平泉

和泉や塩竈明神及の上　裏中

美羅川滝殺生石の山を田村

九義家旧跡栗駒ヶ嶽　雪

おはし

けられよ俳句うてや奥社雪

出羽の国よりゆく立石寺よ詣

湯殿山の禁秘清水を飲ム

是はしや湯殿の宮を雪の山

羽黒山は坊中まく

杜若見良う植しう南谷

あけみ山や佐渡より西よ入日哉

象潟白々や

岩穴やすゝ風くゝし矢草坂

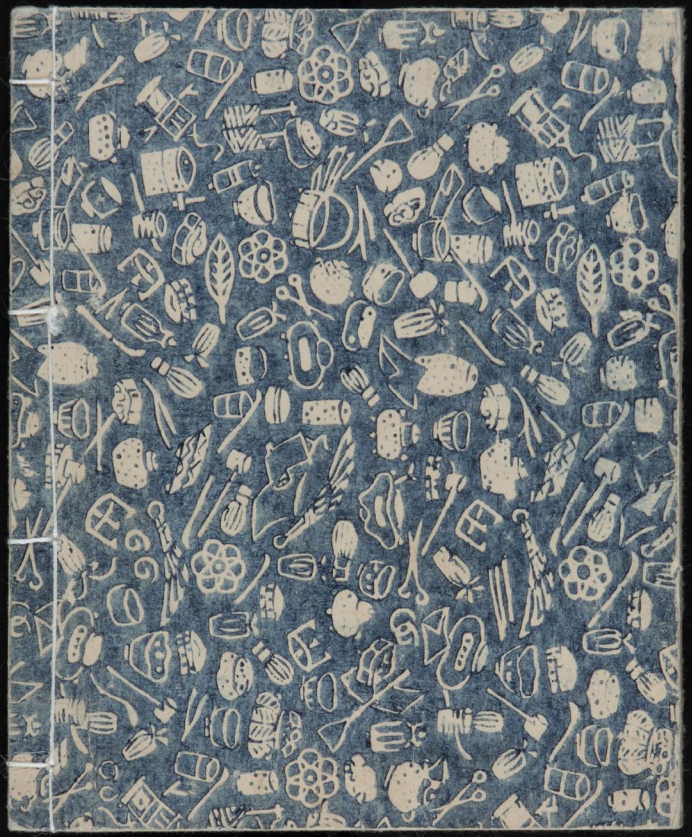
金澤城下高野

橋為て二階をかゝの暑さし

籐原八懐を宝物おほし

越氣比の社をおし近に仮

をかして帰りぬ

戊子春

奈良女子大図書館
20109
昭和26年7月21日